

江戸における小三金五郎物の変容

はじめに

小三金五郎物とは、元禄期の大坂に実在した湯女の小三と歌舞伎役者の金屋金五郎の情話をもととした作品群である。小三金五郎物は、はじめ大坂において巷説をもとしながら、歌祭文や浄瑠璃で行われた。その後、歌舞伎や戯作においても行われ、上方のみならず江戸でも行われた。しかしこれらの小三金五郎物作品に対して、それぞれ解題が付されるものの小三金五郎物全体について述べたものはほとんど見られない。唯一、渥美清太郎により『系統別歌舞伎戯曲解題』^[1]で、小三金五郎物作品がまとめられているものの、歌舞伎や浄瑠璃を中心としており、戯作に関する記述は見られない。

そこで、小三と金五郎を主人公とした作品を精査したとこ

黒澤 暁

ろ、⁽²⁾上方で巷説を中心とした作品から、次第に心中の結末となるなど、変化が見られた。そして江戸では文化期に入ると、家宝詮議の筋で小三を男嫌いの人物にするようになり上方の小三金五郎物に影響を与えた。これについては、拙稿「上方における小三金五郎物―「南詠恋抜書」を中心に―」⁽³⁾で江戸の小三金五郎物作品、特に歌舞伎「東都名物錦絵始」や歌舞伎「裏模様菊伊達染」^{うらもようきくのだてぞめ}の影響によるものであると述べた。

それでも江戸でどのように小三金五郎物が発展したかについては、いまだ言及されていない。そのため本稿では、江戸の小三金五郎物に注目し、江戸での定着について述べる。江戸での小三金五郎物の特徴は、家宝詮議の筋をとること、「額」が額絵馬を意味すること、小三が男嫌いの性質を持つことが挙げられる。これらの特徴に注目し、小三金五郎物が江戸においてど

のように定着し、広まったのか述べる。また歌舞伎に限らず戯作への影響もみられるため、人情本『仮名文章娘節用』についても述べる。

歌舞伎「東都名物錦絵始」

江戸ではじめに小三金五郎を主人公とした作品は、管見の限りでは歌舞伎「東都名物錦絵始」(以下「錦絵始」)である。「錦絵始」は、文化八年(一八一七)正月に江戸中村座で初演された。その後弘化二年(一八四五)三月に江戸河原崎座で「東都名物錦絵始」、安政五年(一八五八)一月に江戸市村座で「柳島・噂・錦絵」、文久二年(一八六二)一〇月に守田座にて「柳島・噂・錦絵」として再演されている。繰り返し上演されていることから、「錦絵始」は江戸で人気のある演目の一つと考えられる。そこで「錦絵始」の内容を確認したい。本作品はお駒才左の筋とないまぜとなっており、小三金五郎に関するあらすじは次のようなものである。

金五郎は、身をやつして紛失した主家の家宝を詮議する。金五郎は妙見参りで見たと芸者小三の額の筆跡で心奪われる。小三に執心する秋月一角は、偽の手紙で金五郎を陥れるも、小三が

金五郎の窮地を助け、二人は恋仲となる。一角は小三をあきらめきれず金五郎に家宝と引き換えに小三から身を引くよう持ち掛ける。金五郎はこれを受け入れ、小三の前で起請文を捨てて。一角は小三に言寄るも拒絶され、金五郎とうり二つの名月院(実は金五郎の兄)と小三が座敷に居る場面を見て金五郎と切れないと思ひ激昂するが、小三が旧恩の娘であることが分かり、一角は小三から身を引く。金五郎は家宝を取り戻し、大団円を迎える。

ここでまず注目したいのが、小三の「額のこ小三」という称である。上方・江戸ともに小三は「額のこ小三」と呼ばれているものの、この「額」が意味するものに変化がみられる。

上方においては、小三が湯女であったことから、歌舞伎「南詠恋拔書」(筑後の芝居・文政一二年(一八二四)上演)で「オ、誰かと思ふたら額風呂の小三、何か用か。」といった呼称がみられる。しかし「錦絵始」では

辺竹 イヤお客より小三さん、芸者に似合はぬきつい物識り(中略)

ひで そこで誰れいふとなく
いと 額のこ小三様と
皆々 云ひますわいなア

とある。ここでは、小三が「芸者に似合はなぬきつゝ物識り」で学識があることから、「額の小三と呼ばれている。ここでは、上方のように小三が湯女であったことの関連は見られない。さらにここでの額が、学識だけでなく額絵馬の意味を含んでいることが、「錦絵始」の番付から【図一】見ることができる。

【図一】「錦絵始」辻番付（二部抜粋）〔早稲田大学演劇博物館所蔵〕



【図一】は、一幕目の妙見参りの場面を描いたものである。ここでは、小三が妙見参りをし、自らの姿絵を描いた額絵馬を額堂にかける様子である。

つまり「錦絵始」では、額が額絵馬を指しており、小三の多才を褒めるとともに、小三と金五郎を結びつける役割を担っているのである。

この場面は、「錦絵始」の後に成立した小三金五郎物の合巻『奉

納額小三』（篠田金治作・文化一一年（二八一四）刊）にも見ることができ、この『奉納額小三』は、富士浅間物の筋に小三金五郎を登場させている。あらずじは、富士の楽の上手に嫉妬した浅間により、富士の家宝の巻物を奪われ富士を殺害、富士の娘小みつは、小三と名を替え芸者となり敵を討つというものである。本作品は、「錦絵始」とは異なり、小三が家宝の詮議と敵討ちを行うという変化がみられる。

そして、額について作中のような場面がある。

小さんは何とぞして巻物の行方尋ねんものと、都の神社へ願掛けなし、なかんづく祇園のやしろは所のうぶすなゆゑ、日ごとくに宿願なし、そのころ名高き浮世絵師菱川何がしが筆にわが姿を描かせて、絵馬堂にかけけるに筆をくはへ描きし事ゆへ、しよにん此姿絵にうつ、をぬかして見とれけるもの多かりき⁽⁷⁾

右のように『奉納額小三』では、小三が家宝を探し出す願掛けとして額を奉納する理由に相違がみられるものの、小三が姿絵を描いた額絵馬を額堂にかけている点は、「錦絵始」と共通する。また『奉納額小三』では、小三の姿絵を見初める場面がある。

ひそかに深編笠にて身を隠し絵馬堂にゆきて見るに、小さんとはいへるは美しき女の絵にてありけるゆへ、思はずしは

し見とれ、我知らず此女に執心なし、かゝる女を手にいれ
なば、一生の思ひ出ならんものと思へど繁華の地むさと
遊所へたちよらんも身のうへの大事とそれより小三を手
に入ん事を工夫なしける^⑤

ここでは、小三を見初めるのは金五郎ではなく小三の敵である。
これにより敵は小三を手に入れるべく悪計をめぐらす。額によ
り結びつく相手に違いは見られるものの、『奉納額小三』では、
「錦絵始」と同様に、額絵馬は小三と男性を結びつける役割を
担っているのである。つまり「額」という言葉が、上方では小
三の身元を表していたのに対し、江戸では「錦絵始」や「奉納
額小三」のように「額」が額絵馬を意味し、小三と男性を結び
つける役割を果たしている。

次に、「錦絵始」に見られる小三の一角への態度に注目したい。
小三が金五郎と恋仲になる以前は、次のような態度をとる。

小三 御深切によう云うておくれた。嬉しうござんす。……
ト合ひ方かはり、こなしあつて鶯籠を向うへ持つ
て出て

小三が今の身の上は、丁度此鶯と同じ事。(中略)
小三 わたしが願ひは、まッ此通りに、……(卜籠の口を
明ける。鶯はバツと飛んで庭の椿の枝へ留まる。)

ここでの小三は、一角に身請けされることを拒否しているもの
の、一角以外の客に対しても同様になびかない人物であること
が想像できる。

ところが一角が金五郎を偽の手紙で陥れ、小三と金五郎が恋
仲になった後は、小三の態度に変化が見られる。

小三 いつぞや根岸でお前の企み、おいとしさうに金五郎
さんに、恥をか、せて打ち打擲。わたしや今に思ひ
出すと、悔しうてく、熱い涙がこぼる、わいな。
其怒みのある角さん、たとへどのやうになさんして
も、何のお前に随はう。エ、顔見るも無益しい、こ、
放して下さい。

この場面では、小三は一角が金五郎を偽の手紙で打擲したこと
から、一角を拒絶している。ここでの小三の拒絶は、先に引用
した金五郎と恋仲になる以前の態度とは異なり、一角を明らかに
憎み、強い態度で拒絶している。このように「錦絵始」での
小三は、はじめ誰にもなびかない芸者として登場するも、金五
郎と恋仲になった後は、金五郎に恥を与えた一角への恨みから
強く拒絶しているのである。そして、この一角への恨みは、小
三の金五郎への強い情によるものと考えることができる。

その後、小三をあきらめられない一角は、詮議する家宝と引

き換えに小三と別れるよう金五郎に詰め寄り、金五郎はこれを受け入れる。金五郎が小三に愛想つかしを行った後、一角は小三に言寄るも、次のように拒まれる。

小三 思ふ殿御に捨てられて、廻り／＼てそなたゆゑ、怨み重なる一角殿。

一角 余りといへば。

ト寄る所へ、一角が横顔を平手にてびつしやり。

ここでの小三は、「廻り／＼てそなたゆゑ、怨み重なる一角殿。」とある。この「怨み重なる」とは何を指すのだろうか。金五郎が家宝のために小三と切れる決意をしていることは、小三は見聞きしていない。しかし、小三は金五郎の愛想つかしが一角によるものであると気づいていると考えられる場面がある。

一角 金五郎、わりやよく身共をたばかつたな。(中略)

小三 さう云ふが、やつぱりお前の

右は名月院(実は金五郎の兄)を金五郎と見誤った一角が座敷に乱入する場面である。これに対して、小三は「やつぱりお前の」というのである。この小三の台詞は、一角の指金によって金五郎が愛想つかしをしたのかという思いが含まれていると考えられる。

また小三は、金五郎が愛想つかしをした理由を察していると

考えられる。そのため小三は、金五郎が詮議する家宝のため、つまり義理のための愛想つかしであると感じ取っているのではないだろうか。

そのためこの「怨み重なる」とは、金五郎に辱めを与えたことへの恨みに加え、金五郎に愛想つかしをさせたことへの恨みを指していると考えられる。つまり小三の一角への感情は、金五郎を打擲した恨みと、金五郎との仲を引き裂いた恨みと言え

る。こうした小三の一角への恨みは、一角になびく場面より明らかになると考えられる。小三が一角になびく場面は次のようなものである。

一角 その非道の根を糺さば、小三、われが心一つ。まだ此やうな事ではない。憂き目を見せた其上で、金五郎をなぶり殺し。(ト名月院びつくり震ふ。)是非金五郎が助けたくば、思ひ直して身共に靡くか。

小三 サア、それは。(中略)

一角 返事せい。小さん、どきどきだ。(ト小三色々あつて)

小三 是非に及ばぬ。抱かれて寝よう。

この場面では、一角が金五郎と見間違えて名月院を打擲し、小三になびくようせまっている。ここで小三は金五郎の命のため、

一角になびく決意をする。しかし前述したように、小三は金五郎への情から一角に対して、金五郎を打擲した恨みと金五郎との仲を引き裂かれた恨みを抱いている。そのためこの場面の小三の決意は、単に金五郎と結ばれない悲しみにとどまらず、憎む相手に屈する悲しみが含まれているのである。そのためこの場面では、金五郎への情から生まれた小三の重層的な感情を見ることができるのである。

以上述べてきたように、小三は金五郎への情から一角を強く拒絶するも、金五郎の義理による愛想つかしを感じ取っている。その上で小三は金五郎の命のために、一角になびいている。こうした小三の姿から、「錦絵始」の小三は金五郎への情をもととして行動しているといえる。

この「錦絵始」で描かれた小三像は、江戸の小三金五郎物の基礎となり、後の小三金五郎物に影響を与えることとなるのである。

歌舞伎「裏模様菊伊達染」

次に「裏模様菊伊達染」(以下「菊伊達染」)がどのように「錦絵始」の影響を受け、変化したか述べる。本作品は、文政二年

(一八一九)に江戸河原崎座で上演された。本作は台帳が現在確認できないため、番付やその一幕として上演された浄瑠璃「浮名の立額」の詞章から推測される。これらによると本作の内容は、次のようなものである。

金五郎は、宝物詮議のため身をやつす。芸者額の小三は黒沢官蔵に執心される。官蔵らにより小三は薬を飲まされるも、金五郎の介抱により回復し、二人は恋仲になる。小三は金五郎の詮議する家宝のため、金五郎に置手紙で愛想つかしをする。金五郎は小三が官蔵になびいたと勘違いし怒るも、金五郎の兄の説得による愛想つかしとわかる。後に家宝を取り戻し、金五郎は婦参が叶う。

ここでは、「錦絵始」同様に家宝紛失の筋を用いること、金五郎の恋敵に官蔵が配されていること、愛想つかしがみられることなど類似する筋が用いられている。

そこで前項で述べた「額」の意味、愛想つかしに注目し、「菊伊達染」で小三金五郎物がどのように変化したか考察したい。

まず、小三の呼称の「額」について述べる。これについては、「浮名の立額」の詞章に見ることができる。この「浮名の立額」の詞章は、『清本節正本集』(清元延寿太夫作・刊年不明)に所収されており、その内容を知ることができる。この「浮名の立

額」で額について、次のような詞章がある。

よそほかのなんの殿御をもつものと、むねの誓ひは額堂の
男の文字に錠前をしやんとおろした大願に、額の小さなと
人さんがいはしやんすのを幸いに、男ぎらひな野暮芸者ひ
ねり者じやと客人が笑はるゝのがうれしうて、いろけの無
いもお前ゆへ。

右の詞章は、小三の心変わりを責める金五郎に対し、小三が誤
解を解こうとする場面で語られる。ここでは小三が金五郎に対
する思いの深さを語るものである。この詞章から「錦絵始」と
同様に、「額」は額絵馬を意味している。

また右の引用で「男の文字に錠前をしやんとおろした大願」
という詞章があり、男断ちの決意の強さと言えよう。ただしこ
の男断ちを示す詞章は、小三の心理を表現していることに留ま
らない。実際に小三が男断ちを表明していることが、番付から
わかる。

【図二】は「菊伊達染」の番付である。ここでは男の文字と
錠前が組み合わされた額が見られ、「浮名の立額」の詞章が図
像化されている。

【図二】菊伊達染 辻番付（一部抜粋）〔早稲田大学演劇博物館所蔵〕¹⁰⁾



引用した詞章と【図二】からわかるように、「菊伊達染」の小三は、
男断ちを芸者小三の特徴として表明しているのである。

さらに小三が男断ちを行う理由について、次のような小三の
言葉がある。

まだ肩あげの三年後、船の内なるお情を忘るゝ、ひまもなま
なかに、ませたやうでもどこやらにおさな心の後もなふ、
お顔も知らて立別れゆかしい故に是こゝに、たれとふしみ
とはづかしい¹¹⁾

これにより小三の男断ちは、以前契った金五郎との再会の願掛
けとして行われていることがわかる。

以上のように、「錦絵始」では、額が小三と金五郎を結びつ
ける役割を果たしているのに対し、「菊伊達染」では、小三の特
徴を表す図像を描くことで、小三が金五郎との再会のために男

断ちをする人物と知らしめる役割へと変化している。この「菊伊達染」で見られた額の図像は、のちに成立する小三金五郎物作品においても見る事ができる。

【図三】「契比翼額襖」 絵本番付（一部抜粋）〔早稲田大学演劇博物館所蔵〕¹²⁾



【図四】「盟結艶立額」 辻番付（一部抜粋）〔早稲田大学演劇博物館所蔵〕¹³⁾



右の【図三】は、歌舞伎「契比翼額襖」の、【図四】は歌舞伎「盟結艶立額」の番付である。「契比翼額襖」は、天保八

年九月（一八三七）に江戸の森田座で上演された歌舞伎で、「盟結艶立額」は嘉永三年（一八五〇）九月に江戸中村座で上演された歌舞伎である。両作品とも台帳は現在所蔵不明のため詳細な内容は不明だが、家宝紛失の筋が用いられている。そして両作品とも、「菊伊達染」と類似する図像が見られ、小三が男断ちを表明していることがわかる。このように「菊伊達染」と類似する図像の額が用いられていることから、「菊伊達染」の小三の男断ちの特徴は、江戸の小三金五郎物の新たな特徴の一つとして定着しているということができる。

次に「菊伊達染」で見られる愛想つかしに注目したい。愛想つかしについて、「浮名の立額」に次のような詞章がみられる。

一条（小三）「まあく待つて下さんせ、最前手詰めの鯉魚の置物、お前に渡さんため斗、心にもない此切文、ことにお国のおまへの兄様、わたしをひそかにお召しなされ段々との御教訓、のかねばならぬしぎとなり、愛想つかしをいふたのも推量してくださんせいナア。」

菊（金五郎）「すりや勘蔵がこしらひ事、そふとは知らないで今の仕儀、して又兄のたん三殿そなたにあつこふ義理づめも、此置物が偽物では所詮生ていらぬ身」¹⁴⁾

右引用部は、小三の心変わりを責める金五郎に対して、誤解を

解く場面である。この引用から、金五郎の兄の説得により小三が金五郎に愛想つかしを行い、それを官蔵が利用したということがわかる。

「錦絵始」とは異なり、本作品では小三から金五郎へ愛想つかしが行われている。しかし、愛想つかしをおこなう原因が詮議する家宝のためであることは共通している。この家宝のための愛想つかしが金五郎の行動から小三の行動へ変化したことで、小三の心情も変化していると考えられる。

そして前項で述べたように、「錦絵始」では義理から金五郎が小三へ愛想つかしを行い、小三は金五郎への情から一角へなびく決意をしている。

これに対して「菊伊達染」では、小三が金五郎の詮議する家宝のため愛想つかしを行う。そして小三が愛想つかしを行うのは、右引用部に「手詰めの鯉魚の置物、お前に渡さんため」とあるように、金五郎の詮議する家宝のためである。またこの愛想つかしは、金五郎の兄からの説得に応じた結果である。これにより「菊伊達染」では、金五郎の帰参のため、つまり金五郎への義理が身を引く理由となるのである。このように「錦絵始」の小三が、金五郎の情により一角へなびいていたのに対し、「菊伊達染」では、金五郎への義理から小三が愛想つかしを行うも

のへと変化し、小三の心情に変化が生まれている。

以上のように、「菊伊達染」では「錦絵始」の要素を多く受け継ぎながらも、変化を加えていることがわかる。小三の呼称である「額」については、「錦絵始」と同様に額絵馬を指すものだが、その額に男断ちという小三の特徴を表す画像を描くことで、小三の人物像を定着させた。これにより、額の画像とともに小三の人物像が今後の小三金五郎物における小三の人物像を決定づけることとなった。

以上述べたように、「菊伊達染」では小三を男断ちする人物とし、この特徴を画像化した額を掛けている。小三の男断ちは画像と共に定着し、後の作品においても小三の特徴として見ることができた。また「錦絵始」で金五郎が行っていた愛想つかしを、本作品では小三が行っている。これにより小三が金五郎への義理により行動する人物へと変化した。このように、「菊伊達染」は「錦絵始」をもとにしつつも小三の人物像を容させ、後の作品に影響を与えた作品といえることができる。

人情本『仮名文章娘節用』

小三金五郎物の戯作作品としては、人情本『かなまじりひすめせつよう仮名文章娘節用』

(以下「娘節用」)が挙げられる。『娘節用』は天保二年(一八三一)に初編刊行された曲山人による人情本作品で、人情本の中でも傑作の一つと評されている。¹⁵⁾ 小三金五郎物としての本作品の成立について、

「錦絵始」を承けて、「娘節用」を発くものでなければならぬ。わづかな変更と増補が「娘節用」を完成する筈である。(中略)しかし、「浮名の立額」に拠るところの多いことだけはたしかである。¹⁶⁾

と山口剛により指摘されている。一方で、鈴木圭一は、天理大学付属天理図書館所蔵の写本『人情夜の鶴』が本作品とほぼ同じ内容であることから底本の可能性を示唆している。¹⁷⁾ ただし本稿では、『娘節用』が登場人物名を小三金五郎へと変化させたことから、あくまで小三金五郎物の一つとしてとらえ、小三金五郎物としての位置づけを試みるものとする。底本との比較と考察は稿を改めて行いたい。

まず、『娘節用』のあらずじを確認したい。左にあらずじを記す。

鎌倉の武家仮名屋文字丞は主家の腰元玉章と駆落ちする。玉章は京で金五郎を出産後亡くなる。同じく妹娘を出産後、妻に先立たれた屑鉄買いを哀れみ、文字丞は妹娘のお亀を引き取る。

お亀と金五郎は成長し恋仲となる。折しも仮名屋の跡を継いだ文字丞の弟には、男児がおらず金五郎を婿とし、仮名屋を相続することとなる。悲しむお亀は、ある夜不思議な声に誘われて家出し、行方不明となる。お亀の行方不明を知り、深く悲しむ金五郎はお亀と瓜二つの遊女清鶴と出会う。語り合うとお亀の姉お鶴であった。後に、金五郎は芸者小三となったお亀と出会う。金五郎は小三を請出し、一子金之助をもうける。金五郎の放蕩を危惧した祖父白翁は、小三の宅を訪れ金五郎から身を引くよう頼む。小三は、姉に金之助を託し、一人自宅で自刃する。小三の死を知った白翁は、小三がお亀であったこと、金之助という子がいることを知り、後悔する。小三を先妻、お雪を後妻、金之助を継嗣とし、白翁は雲水となる。

『娘節用』では、「錦絵始」や「菊伊達染」のように家宝の詮議を行わない。また小三に執心する金五郎の恋敵が登場しないため、「錦絵始」のように苦渋の末一角になびく小三の姿や、「菊伊達染」のように義理から小三の愛想つかしの姿が見られない。何より、団円の結末を取る歌舞伎作品とは異なり、小三が自刃する結末となり、内容に大きな変化が見られる。

しかし小三が金五郎以外になびかない姿勢や、小三が金五郎に書き置きを残すという「菊伊達染」の趣向の利用に歌舞伎作品

の影響を見ることが出来る。そのため本項では、「錦絵始」「菊伊達染」と同様に「額」の意味、小三の男嫌い、愛想つかしに注目して、『娘節用』における小三金五郎物の影響について考察したい。

まず、「錦絵始」や「菊伊達染」で額絵馬を意味していた額の呼称については、『娘節用』では、お亀が芸者として売られた置屋が「額俵屋重兵衛」のため、額俵屋の小三という意味の「額の小三」という呼称となる。『娘節用』では「錦絵始」のように金五郎と結びつける役割や「菊伊達染」のように再会の願掛けを行わない。そのため本作品では額絵馬と結び付けることなく、屋号を用いて「額の小三」という呼称としている。これは歌舞伎の「錦絵始」や「菊伊達染」とは異なり『娘節用』では、小三と金五郎が幼いころにすでに出会い恋仲であったため、額絵馬の役割が必要なかったであろう。

ただし『娘節用』にも小三の男断ちと考えられる記述がみられる。

わが身ながら婆々アじみたとおもふやうだよ。夫だから座しきへ出ても、お客がみんなわたしの事を、子もち山姥だなんのといふから、わたしも夫をやつぱり通して、斯いふ唄を唄つてやるよ。(中略) かわいい、人と大ばねを折てこ

しらへた子だから、出来合の子とはちつとちがひますといひますから、色気がなくつてい、といつて、呼んでくださるからおかしいのサ。⁸⁾

右の引用は、金之助を出産したのち再び芸者となった小三の台詞である。ここでの小三の姿は、「浮名の立額」の「男ざらひな野暮芸者ひねり者じやと客人が笑はる、のがうれしうて、いろけの無いもお前ゆへ」と類似すると考えられる。ただし、『娘節用』の小三は、「錦絵始」の一角のように恨むべき相手がおらず、「菊伊達染」のように金五郎との再会のため願掛けを行っていない。そのため小三には、これらの作品のように強く男を拒む理由は生じないものの、金五郎に請け出されたこと、金之助という子供がいることを公表している。このように小三は、客と恋愛関係を持たないことを特色とした芸者として売り出しているため、男断ちを行っているといえる。

そして小三の愛想つかしについては、後編下巻の末に「是れより小三、金五郎に、愛想つかしをいふや否や、そは三編を見て知り給ふべし。」とある。しかし小三は金五郎に愛想つかしを行わず、金五郎には金之助の行く末と自分の弔いを頼み、小三は一人自刃するのである。

この小三の自刃については、金五郎の祖父白翁が小三を説得

したことを原因としている。金五郎の身内の人物が小三に身を引くよう説得することについては、「菊伊達染」で金五郎の兄が小三に愛想つかしをするよう説得したことに類似する。『娘節用』で白翁の説得として、次のような場面がある。

こなさんを内へ入れたなら、孫めが尻も落つくであらうけれど、上へのきこえ世間のおもわく、義理と人目の詮かたなさ。たのみといふは茲の事。(中略) だん／＼深いやうすがあつて、あれが親は家出なし、其の弟が今での家督、その養子となりし金五郎、あかの他人といふではなければ、養子と名のつくかなしさは、おもふにまかせぬ世間の人目の引用のように『娘節用』では、金五郎の養子という立場から金五郎が家に居つかない世間体のわるさを小三に語る。この場面は「菊伊達染」で小三が金五郎の兄の説得を受け入れて愛想つかしをしたことと類似する。そして「菊伊達染」では、詮議する家宝に加えて金五郎への義理を理由としている。しかし『娘節用』では、家宝の詮議をしていないため、小三は金五郎と金五郎の養家に対する義理により、身を引くこととなる。特に、金五郎の父は駆落ちという不忠を家と主家に対して行っているため、金五郎の進退は、金五郎と養家のみならず、実父の名誉回復にもつながる。その上、小三は金五郎の実父によつて

育てられている。そのため、右で引用した白翁の説得に応じることが、小三にとつて養父への義理を果たすことへとつながるのである。

このように『娘節用』で小三が義理により白翁の説得を受け入れる姿は、「菊伊達染」の小三と同様に義理による行いである。ただし『娘節用』では小三が金五郎の父に育てられていることで、義理の対象が金五郎だけでなく養父へもむけられており、一層小三の義理深い人物となるのである。そして、この義理深さから小三は身を引く手段として自刃するのである。

小三が金五郎から身を引く姿は、「錦絵始」では、金五郎の命のために一度は一角になびく決意をし、「菊伊達染」では、愛想つかしとして見られる。しかし、こうした両作品の行動は、一度は金五郎への操立てを破っているということが出来る。ただし『娘節用』では、小三に恋敵が配されていないこと、義理深い人物であることから、他の男性を選ぶことができず自刃を選ぶのである。そのため小三は、金五郎への操立てを破ることはないものの、団円へつながることができないのである。

このように『娘節用』では、額絵馬や家宝詮議の筋などの構成において「錦絵始」や「菊伊達染」と類似が見られないものの、江戸の小三金五郎物の特徴を踏襲していると考えられる。男断

ちについては、金五郎や金之助を公表しつつ芸者となっていることで、「菊伊達染」で見られた男断ちと類似する。また、「菊伊達染」の小三の義理を『娘節用』では小三を金五郎だけでなく金五郎の父へも義理のある人物とすることで、さらに義理深い人物へと発展させた。つまり『娘節用』の小三は、額絵馬や愛想つかしを用いることなく、江戸の小三金五郎物の特徴を表しているといえるのである。そして『娘節用』で見られた特徴の多くは、男断ちや義理深さなど「菊伊達染」でみられた小三の特徴と類似する。

以上述べたことから、小三金五郎物としての特徴は、「菊伊達染」において定着したと考えられる。江戸で最初の小三金五郎物である「錦絵始」では、額の意味を額絵馬へと変化させ、小三を金五郎への情から一角を振切る人物とするなど江戸の小三金五郎物の特徴の萌芽を見ることができ、そして「菊伊達染」では、額絵馬を金五郎の再会の願掛けに用い、小三の男断ちを意味する画像を描いた。この画像は後の小三金五郎物作品においても見ることができ、『娘節用』においても子持ちを公表することで同様の役割を果たし、「菊伊達染」の小三像が定着しているということが出来る。さらに「錦絵始」で金五郎から行われた愛想つかしを、「菊伊達染」では小三から行うもの

とすることで、小三を義理の人物へと変化させた。こうした小三の義理は、『娘節用』においては、金五郎の父を養父とすることで小三の義理をより発展させている。つまり江戸における小三金五郎物は、「錦絵始」をうけて「菊伊達染」によりその特徴が決定づけられたといえることができる。

終わりに

本稿では、江戸の小三金五郎物がどのように変容したか「錦絵始」「菊伊達染」「娘節用」の三作品から考察を行った。「錦絵始」では、従来上方で「額風呂」を意味する「額の小三」という呼称を額絵馬の意味に変化させ、小三と金五郎を引き合わせる役割を額絵馬に託した。また小三が金五郎への情から一角を恨むことで、一角へなびく場面において小三の重層的な感情を表現している。

これをうけて「菊伊達染」では、額絵馬に小三の金五郎との再会の願を託し、男断ちを意味する画像を描いた。この画像は、後の小三金五郎物へも影響を与え、小三の人物像を決定づけた。また小三から愛想つかしをすることで、金五郎への義理による行動へと変化した。

こうした「菊伊達染」の特徴は、『娘節用』においても見ることが出来る。『娘節用』の小三は、子持ちであることを公表していることで、額絵馬と同様の役割を果たし、金五郎の父を養父とすることで義理をより強いものへと変化している。『娘節用』では、「錦絵始」や「菊伊達染」のように家宝紛失の筋を用いず、小三に執心する恋敵も登場しないものの、小金五郎物の特徴を成立させている。

このように江戸の小三金五郎物は、「菊伊達染」によりその特徴の多くが形成され、『娘節用』では形を変えながら踏襲されている。

〔注〕

(1) 渥美清太郎『系統別歌舞伎戯曲解題』(二〇〇八)一二年、日本芸術文化振興会

(2) 本調査にあたり、次のデータベース・目録を用いた。

[NDL-OPAC] (国立国会図書館)・[日本古典籍総合目録] (国文学研究資料館)・[デジタルアーカイブコレクション] (早稲田大学演劇博物館)・[摺物データベース] (東京大学文学部史料編纂所)・[芝居番付画像データベース] (東京大学文学部)・[歌舞伎浄瑠璃等番付集] (立命館大学アート・リサー

チセンター)・[芝居番付目録] (一九六八年、大阪府立図書館)・

『芝居番付絵尽目録』(一九八一年、大阪女子大学附属図書館)・

『歌舞伎絵尽くし年表』(一九八八年、桜楓社)・[芝居番付目録]

一〜三(一九八一〜九〇年、阪急文化財団池田文庫)・[芝居

番付目録] (一九九一年、横浜開港資料館)・[江戸芝居絵本

番付集・朱筆書入れ] (一九九二年、早稲田大学出版部)・[関

西大学所蔵芝居番付目録] (一九九三年、関西大学)・[名古屋

屋女子大学所蔵芝居番付資料目録] (一九九八年、名古屋女

子大学図書館)・[日本大学総合学術情報センター所蔵DVD

版歌舞伎番付集成] (二〇〇四年、日本大学総合学術情報セ

ンター)

(3) 拙稿「上方における小金五郎物―「南詠恋拔書」を中心に―」『千里山文学論集』第九七号(二〇一七年九月、関西大学大学院文学研究科)

(4) 「南詠恋拔書」は、安永九年(一七八〇)の大坂角座が初演だが、文政一一年以降の上演より内容に大きな変化が見られ、文政一一年上演時の内容が「南詠恋拔書」の決定稿と考えられる。詳しくは注二同書を参照されたい。なお引用は、阪急文化財団池田文庫所蔵の台帳(請求番号…三二九、四〇一)による。

(5) 『歌舞伎脚本傑作集』第十卷（一九二二年、春陽堂）。以
降「錦絵始」の引用は、当本文に拠る。

(6) 「東都名物錦絵始」辻番付（早稲田大学演劇博物館所蔵、
請求番号：ro22-00010-0040）

(7) 『奉納額小三』（国立国会図書館所蔵、請求番号：京一
二四六）なお読みやすさを考慮し、句読点は私に付し、適宜
漢字に変換した。

(8) 注七と同じ。

(9) 『清元節正本集』（東京芸術大学附属図書館所蔵、請求番
号：W76848*K10）なお、読みやすさを考慮し、句読点を加え、
適宜漢字に変換した。

(10) 「裏模様菊伊達染」辻番付（早稲田大学演劇博物館所蔵、
請求番号：ro22-00043-0095）

(11) 注九と同じ。

(12) 「契比翼額襖」絵本番付（早稲田大学演劇博物館、請求
番号：ro23-00001-0658）

(13) 「盟結艶立額」辻番付（早稲田大学演劇博物館、請求番号：
ro22-00013-0012）

(14) 注九と同じ。なお該当部のみ台詞書に役者名が記されて
おり、読みやすさのため「」で役名を補い、必要に応じて

改行した。

(15) 村上静人「解題」『仮名文章娘節用』（江戸軟派全集
一一、一九二七年、江戸軟派全集刊行会、四頁）では、「人情
本と云へば、『梅暦』『娘節用』などと云つて、人情本を代表
してゐるもの一つである。」とのべている。

(16) 山口剛「解説」『人情本集』（一九二八年、日本名著全集
刊行会）、一七一―一八頁

(17) 鈴木圭一「人情本の型」『中本研究―滑稽本と人情本を
捉える』（二〇一七年、笠間書院）、一三七頁

(18) 『仮名文章娘節用』（関西大学附属図書館所蔵、請求番号：
文庫（特別）124*11-26*1-3）以降『娘節用』の引用は、当
本文に拠る。

くろさわ さとり／本学大学院生